

校長先生の初恋物語

第46話 足長君のトリック

ちん君と、とっくんは、図書室に移動しました。だれもない図書室で、ちん君は足長君がやったずるについて、話してくれました。

「よしこさんの席が最初に決まった。そのしゅんかん、よしこさんのとなりの席が何番のくじなのかは分かるでしょ。足長君はくじの箱を落としてしまった。それはきつとわざとだよ。床にちらばったくじの中から、足長君はよしこさんのとなりの番号が書いてある紙をぬいたんだと思うよ。きつとポケットに入れたはずだよ。そして、よしこさんのとなりのくじがないまま、みんなにくじをひかせたんだ。だから、最後に足長君がくじを引くときには、箱の中には何も入ってなかったはずさ。だって、足長君のポケットの中にあるんだから。」

すごい。きつとそうです。さすがちん君です。

「ということは……。あのゴミ箱の中にある、くじ引きの箱の中には、よしこさんのとなりの数字が書いてあるくじは入っていないってことか。ゴミ箱の中の箱を調べて、そのくじが入っていないかったら、足長君のずるが証明されるってことか。」

とっくんはいそいで、ゴミ箱のところに走りました。もちろん、くじ引きの箱の中を確認するためです。

すると、「まてよ。」

ゴミ箱のところまで行ったとっくんを止めたのは、足長君です。

「とっくん、何をしようとしているんだ。」



足長君は、あせったような顔をしていました。

「足長君は、ずるをしただろ。お見通しだ。ゴミ箱の中の箱に、くじの紙が1枚残っていなかったら、足長君がずるをしたっていうことのしよこになる。そしたら、そのことをよろひげ先生に言って、くじびきをやりなおしてもらうつもりさ。観念しろ。足長君。」

足長君は言葉に詰まっていた。でも、しほりだすようにして言いました。



「そんなことするな。もしもくじのはこの中に、よしこさんのとなりの席のくじが入っていたらどうするつもりだ。とっくんは、ぼくのことを、うたがったってことになるぞ。そしたら、ぼくたちの友情にひびがはいるぞ。それでもいいのか。それでも箱の中を見るのか。」

確かにそうです。箱の中は、何もないはず。きつと最後のくじは、足長君のポケットの中にあるはず。箱の中に、最後のくじなんてあるわけがない。勇気を出して言いました。

「箱の中を確認する。足長君は絶対にずるをしている。まちがいないよ。ずるはよくないことだよ。」

とっくんは最後にそう言うと、さらにゴミ箱に近づき、ゴミ箱の中からくちゃくちゃに折りたたまれたくじびきの箱を出しました。そして、その中身を確認しました。

「あっ……。」

箱の中は、なんと……、なんと……。



次回予告 きらわれもの